奇妙な本棚

詩についての自伝的考察

詩についての自伝的考察

立風書房版

奇妙な本棚 ―詩についての目伝的考察―

著者 小野十三郎©

発行者 下野博

発行所 株式会社 立風書房

東京都品川区東五反田3の6の18 〒141
電話(447)一一九一 振替東京 七四四九三

印刷所 信毎書籍印刷㈱

製本所 ㈱美術版画社
㈱美成社

定価 一六〇〇円

落丁・乱丁本はお取替え致します。

0095―1258―8903

奇妙な本棚／目次

第一部

自然はおそろしく退屈だ　9

この白い小さな手よ　21

椎の木の若葉　33

賭と恐怖　45

カアル・サンドバアグと出会う　57

家郷の観念　69

補　註　81

第二部

葦の地方　95

露天営業組合連合会　107

昭和十八年夏　119

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

奇妙な本棚　131
二見ケ浦のアリラン　144
猿のこしかけ　156
補　註　167

第三部

群　雀　173
アルコールと豚のホルモンについて　188
引越しぎらい　200
「緑の鸚鵡」　211
集会　旅行　サークル　223
笠置対談　235
詩集・朝鮮戦争　247

この章はパチンコからはじまる　259
「夜の詩会」から文学学校まで　271
五月雨をあつめて早し最上川　283
大砲　294
補註　306
あとがき　326

奇妙な本棚

——詩についての自伝的考察——

装幀

上田春雄
森　幸雄
木村栄次

第一部

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

自然はおそろしく退屈だ

近鉄奈良線に、「がくえんまえ」（学園前）という駅がある。富雄とあやめ池の中間で、駅のすぐ傍のきりひらかれた丘の上に、三基の白い円型校舎がそびえている。これは、わたしがいま通っている大阪の帝塚山学院の姉妹校である帝塚山学園の校舎だ。昨年の春から、こちらにも女子短大が設置されて、大阪の学校とかけもちで、週に一度毎水曜日の朝やってくることになった。ラッシュ時だが、逆コースになっているので、急行に乗ると、鶴橋から、中央市場へ仕入れにいった大和の魚屋さんが、大きな包みを肩にかけて乗りこんでくるくらいで、いつも楽に坐れる。三十分とかからず、生駒トンネルを抜けるとそこはもう大和だ。

ああ、大和の国、わたしが生れたのは、大阪も難波新地のどまん中だが、赤ん坊のとき大和郡山の親戚の家にあずけられて、小学校五年までそこでくらした。晴れた日に、円型校舎の屋上に上って、生駒、信貴、葛城、春日、高円と四方の山山をながめていると、がらにもなく、少年時のことがいろいろとしのばれる。生駒トンネルが開通したのは、わたしが大阪の実家に帰った後

であったが、二年生か三年生のとき、遠足で郡山から歩いて工事現場を見にいったことがある。ポールのついた無蓋貨車が資材を積んで、トンネルの入口とおぼしきところを出たりはいったりしていた。そのころ、このあたりはただ松林に敝われた起伏の多い丘陵地帯で、むろん「がくえんまえ」などという駅はなかった。わたしの記憶では、ここに学園の校舎が建ってからもずいぶん長い間、付近には人家はほとんどなく、山の中に学校だけがあるというそんなところであった。戦後、それもこの七、八年の間にあたり一帯の松林はきりはらわれ、住宅がどんどんと建ち、赤土の道も舗装され、駅前にはマーケットや信用金庫の小ぎれいなビルなどが建ちならんで、いまは奈良市に編入されるとともに、近代的な田園都市として、見ちがえるような相貌を呈するにいたっている。それに最近はここに、規模こそ大きくないが、大和文華館という古美術の常設展示場ができたため、訪れる人も多くなった。自然改造などというと、話が大げさになるけれども、わたしはこのようにしていま時時刻刻その姿を改めつつある大和の山川には心ひかれる。あのドリームランドというやつにしてもそうだ。奈良に住んでいる文化人に云わせると、アメリカのディズニーランドをまねて、黒髪山の元駐留軍のキャンプがあったあたりに作られたこの広大な大衆娯楽場はどうもいただけたものでなく、三笠温泉郷などとともに奈良俗化の元兇とされているらしいがはたしてそんなものか、わたしなど、ある意味において、大和国原のまん中にアフリカのジャングルが出現したり、西部劇の街が出来たりしていることを大へんおもしろいと思っている。こういう考え方に対して批判や反撃があることは充分予想されるにもかかわらず、わたしはそう思うのだ。

子どものころ、わたしは大和という土地がなんだか退屈で退屈でしようがなかった。まず毎日見ているぐるりの山山のたたずまいだ。東方にのぞむ春日、高円、西方に見える生駒、信貴など

そういう名だたる山に対しては云うまでもないが、わたしを、悩ましたのは、朝起きて、裏庭の井戸端で顔を洗うとき、いつもわたしの眼にうつった一つの山のかたちである。それは高円の尾根を右にたどってゆくと見える一峯で、郡山からのぞくと、頂がややコニーデ状をなしている富士山の亡霊みたいな山だ。いつか郡山の友人に、その山の名をきいたことがあるが、「え？　富士みたいな山？　そんな山あるかな」とふしぎそうな顔をした。むろん名前は知らなかった。してみると、それは春日、高円の尾根のつづきの一ヵ所がそういうかたちになっていたばかりで、大和を郷里とする人たちには大して眼にもとまらない無名の山なのかもしれない。家の庭先からも、教室の窓からも見えるこの山にはわたしはためいきが出るほど退屈したことをおぼえている。山だけではない。少年時の大方をそこですごしたという意味で、わたしにとっては生れ故郷と云ってもよい大和の自然はすべて、そこから伝わってくるおそろしい倦怠感で、わたしの意気を沮喪させる以外のなにものでもなかった。そのころまだ木も多かった郡山城趾の夜桜のながめも、梅雨時に一日ふりしきる雨に煙っている金魚池の風景も、わたしにはなにかしら暗いやりきれない記憶としてしか残っていない。一体、なにがわたしをそんな無感動な子どもにしたのであろうか。これは五十年後に、往時をかえりみての感想ではなく、大和でくらした幼年時のわたしの嘘もかくしもない気持であった。

しかし、そういう退屈な日日の中にあって、ある年のある日、一度だけ、これはこれはちょっと大和にあるものとはちがうぞと大へん興奮したことがある。小学校の三年ぐらいの時だったと思う。後にわたしはそれを「紡績の菊」（＊註1）という題で詩にも書いたが、紡績にいくと真黒な菊が咲いているという話をきいたときだ。紡績というのは、現在も国鉄の大和郡山駅のすぐ近くにある大日本紡績の工場で、毎年秋になると、構内に豪華な花壇がくまれて、菊見でにぎわ

った。その日紡の工場が、石炭のように真黒い大輪の菊の珍種を栽培することに成功したというのだ。見てきた人から直接きいたのか、うわさ話だったのか忘れたし、紡績におもむいて、実際に自分の眼で、その黒い菊を見たという記憶もないのに、黒い菊の幻のような出現は、ある年のある一日、わたしの身辺の退屈な日常に一つの大きな異変を持ちこんだ。このときだけ、あの富士の亡霊のような山もわたしの眼のとどくところから姿を消して、わたしは急に自由になり、解放的な気分になったことを、少年時の、ただ一つ、なんとなく楽しい想い出として持っている。その時間には異常に明るい光があたっているのである。

こんなことをいうと、わたしはまったく孤独でひねこびた子どもだったように思われるかもしれないが、もし子どもにだれにもわからない隠微な内奥の世界というものがあれば、これに類する事がらはだれもが経験したにちがいない。わたしだけの特別の場合ではないのである。しかし大人たちの解せぬ奇妙な世界にひとりいるということはあっても、その他の点では、普通の子どもとなんら変りはなかった。だれからも可愛いがられたし、学校にも、近所にも友だちがたくさんいた。わたしははじめに書いたように、郡山の小学校には五年までしかおらず卒業したわけではないが、先だって、当時の学友たちから、第何回目かの同窓会をひらくから出てこないかという案内状をもらった。前夜来の雨が上って、秋晴れの気持のいい日、わたしはここに嫁いできている娘の顔も久しぶりに見たいので、他の用事をさぼって出かけた。会場は、わたしたちが幼少のころ「りゅうげんさん、りゅうげん山」と呼んでいた古寺の離れ座敷であった。寺は昔の面影をほとんどそのままとどめていた。門をはいって、石段を上ってゆくと、庫裡の方から、かがやくばかりのふさふさした毛並のスピッツの牡犬が走って出てきて、わたしの足もとにじゃれつい

た。わたしの子どものころには、日本にはまだスピッツなどという洋犬は到来していなかった。そんなことや、玄関にともっている螢光燈に、わずかに時のうつり変りを感じさせるものがあった。会場にはすでに三十人ばかりの昔の学友が円座になって集まっている。廊下を渡っていくと、その円座の中から、すばやくわたしを見つけて、「やあ、小野がきよった」と声をかける者もいた。時時こういう会合を持っていたらしい彼らとちがって、なにしろわたしにとっては四十何年かぶりの同窓会であるから、そう云われても、向うが誰だったかまったく想い出せない。わたしはただ「オウ」と一礼してはいっていった。見渡したところ、こんどの集りにはせ参じた者は、この町や、この町の近在に住んでいる者ばかりではないらしい。中にはりゅうとしたダブルを召しておさまっている者もいた。そうしているうちに、わたしのあとからも次々と人が集まってきて、座敷は一ぱいになった。世話役の者が立って開会の挨拶をし、まずはじめに自己紹介をやることになった。同窓会の席で自己紹介とはおかしいが、長年会わなかった者や、わたしのような新参者もいるのだから、それも順序であった。みんな坐ったままで挨拶したが、「おれ、けつねや」とか「おぼえてっか、おれマトバの安吉や」とか、ざっくばらんに昔の仇名で親愛感を出して、かんたんにやってのける者がいるかと思うと、ひどくあらたまって、わたし何々村の何のなにがしで、現在は大阪の本町で何々商店という店をひらいています、みなさんとは……と云った調子で長長とやる者もいたりして、話しっぷりに、子どものころの性格や、また現在の暮し向きがそのままに出て、これがひどくおもしろかった。わたしの番がまわってくると、あとから来て隣に坐っていた和服着流しの男が「小野、おまえ、よう肥ったな」と、ぼそっと云った。直ぐあとでわかったが、このよれよれの垢じみた絹大島を着た芸人風のおやじは、わたしが小学五年生を通じて、無二の親友だった「安堂の常」であった。わたしはこの男と一しょに、筒井の方

まで土筆をとりに行ったり、しじみ取りに行ったりしたものである。安堂の常は、開会の前からわたしの隣りにいたが、わたしの方はすっかり彼の顔を忘れてしまっていたため、取りつくしまがなかったのであろう。みんなの挨拶が一通り終ったときに、安堂の常は、「岡町のところで自転車パンクしよってのう」と、まるでいつも会っている者が道ですれちがったときに声をかけるような調子で話しかけてきた。四十余年ぶりの対面といったあらたまった姿勢は彼には全然なかった。きけば彼は小学を出てまもなく芸で身を立てようとして、ドサ廻りの芝居者の仲間に投じ、散々の苦労をしたあげく、長じて一時は、新世界の小屋で番付のいいところに出るほどになったが、その後肺をわずらって、生れ故郷の村にかえり、兄弟の世話になりながら、いまは百姓仕事などを手つだっているということであった。わたしはこの日、この安堂の常にめぐり会ったことがやはり一番うれしかった。大和の自然は退屈でたまらないと云ったけれど、この男と土筆をとりにいった土堤のあたたかさや、しじみ取りにはいった大和川の水の冷たさなどは不愉快な想い出ではない。そこのところにもちょっぴり非日常的な太陽が明るく射している感じである。安堂の常もおそらく大和の自然のたたずまいに耐えられなかった人間の一人だったのだろう。他にいろいろとわたしなどの想像もできぬ理由もあったろうけれど、若くして彼が故郷を出奔し、旅役者の仲間に投じたことは、紡績工場に咲いたという真黒な菊の幻影が、わたしを悩ましつづけたあのおそるべき富士の亡霊のごときかたちをした山からわたしをつかのま解放してくれたように、それと心理的には相通じる一種の大和脱出であったのだ。わたしはいま強引にそう思いたい。

わたしが詩のようなものを書き出したのはそれからずっと後、中学を出るころであるが、わたしの場合、どうやら詩というものは、幼少のときに、この大和郡山にあって経験した田園の自然

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.